2025/1/19

ルカの福音書　講解メッセージ㊵

『ルカの福音書 17 章 1-19 節　信仰を増してください』

■つまずき

> 「イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。」」（ルカ 17:1）

人は神によって造られ、神によっていのちが支えられています。神は永遠性で、自由であり制限のないお方ですが、私たちが生きるこの世界は有限性で、死があり、制限があります。そのため、人は現実の重さにつまずいてしまいます。

この世界には、苦しみや限界があり、誰もが「死へ向かう時間」の中を生きています。これが聖書の言う「つまずき」です。神抜きでこのつまずきを乗り越えようとしても、それは空想にすぎません。つまずきを越える道は、信仰しかないのです。

信仰とは、神の呼びかけに応答することです。現実から目をそらさず、心に語りかけておられる神の声に従い、神と向き合うこと。これが唯一の解決の道です。そして、この神が人となって来られたのがイエス・キリストです。

イエス・キリストは、「つまずきは避けられない。しかし、わざとつまずきを起こさせる者はわざわいだ」と語られました。これは、イエスを否定し、人々に不信仰を広めていたパリサイ人に向けられた言葉です。

聖書の教えは、現実社会に生きる私たちにとって、つまずきとなるものばかりです。「神が人となった」「三位一体」「救いはイエスだけ」――こうした言葉に、多くの人が疑問を抱きます。しかし、このつまずきを越える道は、信じるしかありません。

ここに神の知恵があると聖書は言っています。神がおられることは、被造物を通して明らかにされており、知識で神を知ることはできません。「信じる」とは、決断です。知識や能力ではなく、信じる信仰によって人が救われるのは、神の知恵によるものです。

つまずきによって神を信じられない状態は不信仰であり罪ですが、同時に信仰へ向かうチャンスでもあります。だからこそ、つまずきを与え、信仰を邪魔する者はわざわいだと聖書は語るのです。

「この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」
（ルカ 17:2）

ここで言う「小さい者」とはユダヤ人のことです。彼らに対して、イエス・キリストを否定して惑わす者はわざわいだ、と語られています。人の理解では神を完全に知ることはできません。理解できないからといってイエスを否定する者は、つまずきを与える者としてわざわいなのです。

「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。 一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度来るなら、赦してやりなさい。」（ルカ 17:3-4）

聖書は、「つまずきを与える者は戒めなさい。しかし、何度罪を犯しても、神に立ち返るなら赦しなさい」と教えています。

重要なことは、何度でも赦すことです。罪は病気ですから、罪そのものと人とは関係がありません。風邪を何度ひいても癒されるように、罪も何度犯しても赦されるものです。

聖書が「赦しなさい」と教えるのは、あなたの苦しみの原因が相手にあるわけではないからです。 人から悪く言われると腹が立ち、つらくなりますが、その苦しみは相手の言葉そのものが生み出しているのではありません。

苦しみの原因を「相手のせいだ」と思うと、赦すことができなくなります。 しかし、あなたの苦しみは相手に由来するものではありません。だからこそ、聖書は「恨まず、赦しなさい」と語るのです。

私たちの苦しみの原因は、人との関係ではなく、神との関係にあります。神は目に見えませんから、神との関係も目で見ることはできません。しかし、人との関係を通して、神との関係を見ることはできます。この世界は、神との関係を映し出すものです。電流そのものは見えなくても、明かりがついていることで電流が流れているとわかるのと同じです。

人は神によって造られ、私たちの中心には神がおられます。神は私たちを赦しておられますが、神との関係が築かれていないと、その赦しがわからず、人を赦すことができません。人を憎むとは、自分の罪が赦されているという自覚がないということで

す。

この神との関係の状態が、私たちの人間関係にそのまま反映されます。

神は愛です。あなたの弱さや罪をそのまま神の前に差し出すなら、神があなたの重荷を背負い、あなたを休ませてくださいます。これが、苦しみの解決方法です。

神との関係ができていないと、人との関係でも互いにさばき合ってしまいます。しかし、神の赦しを受け取るとき、人を赦す力が与えられ、心は平安に導かれます。

■生きた信仰

> 「使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、言いつけどおりになるのです。」
>
> （ルカ 17:5-6）

弟子たちが「信仰を増してください」と願ったとき、イエス様は「からし種ほどの信仰があれば大丈夫」と語られました。からし種ほどの信仰とは、「生きた信仰」、つまり小さなことに忠実な信仰のことです。

> 「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい』としもべに言うでしょうか。かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」（ルカ 17:7-10）

イエス様は、しもべのたとえを用いて、信仰とは「言いつけられたことを忠実に行う姿」であると教えられました。しもべは主人に命じられたことをしたからといって特別な感謝を求めません。ただ「なすべきことをしただけです」と言います。

> 「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。」（ルカ 16:10）

信仰が増し加わるとは、まず小さなことに忠実であることから始まります。小さなことに忠実である例を３つあげてみましょう。

・礼拝を守る
・献金
・感謝をささげること

1 週間 168 時間のうち、礼拝の 2 時間を神にささげることを惜しむべきではありません。私たちは自分のために、その何倍もの時間を使っています。また、神から預けられた富のうち、10 分の 9 は自分のために使ってよいと言われています。だからこそ、10 分の 1 をささげることを惜しむべきではありません。

感謝をささげることも同じです。これらは、あなたの心が神に向く時間を増やす行いです。

聖書は「二人の主人に仕えることはできない」と語ります。私たちはこの世で生きている限り、どうしても心がこの世に向きます。しかし、礼拝の時だけは、この世から離れ、心を神に向けることができます。これが信仰を増し加えることにつながります。

また、聖書は「あなたの富のあるところ
にあなたの心がある」とも語ります。信仰の成長を願うなら、言い訳をせず、小さなことに忠実に御言葉を実行してみましょう。

■誰が天国に行くのか

> 「そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。ある村に入ると、十人のツァラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。」（ルカ 17:11-13）

ツァラアトは治らない重い皮膚病とされ、彼らは隔離され、差別されていました。当時は「罪の罰」と考えられていたため、本人たちも「自分のような罪人は祝福されない」と思い込んでいました。

イエス様が通られたとき、彼らはすぐ近くで叫んだのではなく、遠く離れた場所から声を上げました。そこには、「助けてほしい」という願いと、「自分は祝福を求める

資格がない」という葛藤があったことがうかがえます。

しかし、イエス様が少しずつ遠ざかっていくのを見つめながら、彼らはついに信仰の決断をしました。絶望や苦しみが、信仰を目覚めさせるのです。苦しみと孤独の中で、彼らが目を向けられるものは、もう神しかありませんでした。これが幸いとなったのです。

聖書はこれを、「信仰と共に苦しみをも賜った」（ピリピ 1:29）と語っています。友だちや仲間、楽しみが多いことは、ある意味ではわざわいです。心が神に向かなくなるからです。

「イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

（ルカ 7:14-18）

当時、病人が社会に戻るためには、祭司にいやされた証明をしてもらうことが必要でした。イエス様のことばに従って出発した彼らは、行く途中でいやされたことに気づきました。この時、イエス様のもとに戻ってきたのは異教徒のサマリヤ人でした。彼は絶望の中で神に応答し、癒されました。

神との関係を結ぶパイプは、信仰だけです。ユダヤ人だから救われるわけではありません。ユダヤ人たちは叫びましたが、礼拝しに戻っては来ませんでした。

「主よ、主よ」と言う者が皆、神の国に入るわけではありません。本当に応答したのは一人だけだったのです。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う

者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」

（マタイ 7:21-27）

みこころを行う者とは、 小さなことでも神のことばを忠実に実行する者です。私たちも、信仰を吟味し、まずは神が言われたことを忠実に行うところから始めましょう。

「それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」」（ルカ 17:19）

信仰とは、神の呼びかけに応答することです。応答した者が次に行うことは、神の言葉を信じることです。信じるなら、行動が伴います。本当に信じたなら、御言葉を実行しようとするものです。

今、信じて行う決断をしましょう。

「それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」（ヤコブ 2:17）

信じることは戦いです。つまずかないように信仰を増し加えるには、日々、神の言葉を実行してみる積み重ねが大切です。

ただし、信仰がなくても行いはできます。行いが立派でも、内面が正しいとは限りません。

一番大切なのは、神の前に罪を正直に告白する信仰です。なぜなら、自然に湧き上がる行いは、神に愛されていると知った時に生まれるものだからです。ですから、神の愛を知るために、自分の罪を告白しましょう。多く赦された者は、多く愛するようになります。罪を正直に告白することで、愛されていることを知り、それを原動力にして、日々みことばを実行していきましょう。